

ドーデの作品における「嘘」について

加藤 林太郎

嘘つき少年

ドーデの作品においては、不幸、時には単に心身の様々の苦痛に対し、奇妙な不合理な解決を試みる人物がしばしば見かけられる。彼の創り出す「不幸な人々」は決して幻想という美的乱心にも幸いされず、また一方、行動的な叛心とも多くは無縁であるから、彼らはひたすら耐えるに近いとは云えよう。過重な労働と劣悪な生活環境の中でおおかつ歌をうたつて暮す巡視船の船員『税関吏』はその一例にすぎない。しかしその行為が「耐える」にほぼ等しくはあるが、わずかに存在する相違を認めて作品の題材となしたと思われるものもある。病床の中で手鏡に映した暖炉の火の赤さに、故郷南の島の陽光と暑熱をなつかしみつつ息を引きとって行く南国生れの少女『鏡』。また六弦琴^{シゲール}の奏者たる姉とともにドイツから出て来て、パリの音楽院でクラリネットを専攻していた少年。この少年は胸を病んで、勉強を断念しなければならなくなったが、ホテルの客間のささやかな演奏会では、姉が楽器を奏する時、彼もまた「彼が奏できることを許されている唯一の楽器」即ち架空のクラリネットの上に指を走らせ、熱心に音楽のリズムに合わせて頭を振る『サフォ』。こうした少年少女たちの無邪気でない「問題解決」に作者が率先して感

傷の涙をそそいでいることは推察できるが、彼の少年主人公は時に「嘘」という歴とした手も打つであらう。

ドードエのボート好きは二つの大河の町リヨンへ窮迫の一家が移り住んだ時に始まる。十三才の彼は涙がちな暗い家庭を逃れ、毎日水の上で過していたという。学校をも怠け、口にパイプ、ポケットにアブサントのびんという生意気な姿でボートを漕ぎ暮した。快楽の一日はしかし不安と後悔の念とともに終る。放課時間をとくに過ぎた帰宅と父母の叱責。「戸口をふさいで私を待っている『どこから帰ったの?』』というあの恐ろしい間に立ち向うために、いつも嘘が一つ必要だった。私がいちばん怖かったのは、この帰った時の質問だった。私はあの階段を終わったところで、すぐさま答えなくてはならなかった。あまりびっくりしているいろいろの質問がすっぱり止めになるような驚天動地の物語り、何かの作り話をいつも用意しておかなければならなかった。それがあれば私は中に入って息をつく暇があった。そして、この目的を達するためにはどんなことでもためらわなかった。」革命勃発、大火、鉄橋の崩落などの恐ろしい作り話を彼は用意した。その中の悪の傑作は「法王様が亡くなった。」の悲報であった。階段の上で見張っていた母親は真青になって壁に寄りかかった。信心深い一家の大人たちが、故法王の遺徳を語り合う沈痛な夕べ。嘘つき少年の彼はため息をつき、親たちの話に興味のある風を示し、質問さえする。「明日の朝、法王様は亡くなってなどおられないと知ったら、みんな大喜びで、誰も私を叱る勇気なんかないだろう。」と考えながら『法王様が亡くなった』。

これは叱責恐怖から少年が親相手に打った間に合せの、しかし大胆な狂言でもあらう。しかしドードエの主人公たちは必ずしも必要に迫られての嘘つきばかりではない。「初旅初嘘」の「私」は全くの虚栄心から四日間にわたる船旅の間中海軍士官候補生で押し通す。ドードエの生み出した嘘つきはタラスコンの町のにせ英雄タルタランのみではない。タルタランはむしろドードエの嘘つき人物の中での一地方型にすぎないのではあるまいか。またその嘘の「つき手」も、自立性と想像力に富む活潑な少年ばかりではない。「嘘は誰でもがつくものですが^(a)」とある作中人物は云うけれど

も、そのことはドーデの主人公たちに就いてならばよく当てはまる。「嘘」というこのエゴイズムに発する一行為は、何よりもエゴイズムの描写家たるこの作者にとり、欠くべからざる対象であつたと思われる。誠実、率直で嘘とは全く無縁の作中人物（これも数多い）が、作者が彼らに提供する舞台の広さと好位置にもかかわらず、何か實在感を欠き、淡彩的な稀薄な印象しか与えないのは、不思議な事実である。これは恐らく、彼の嘘つき男嘘つき女たちの方が、作者からも自由な自立力ある作中人物となることを間接的に証明するものであろう。以下はその考察である。

事実の隠蔽

浮気妻が次々と情人を取り替えて繰り返す安易な家出と帰宅に一喜一憂する不甲斐ない亭主ぶりを、人前で残酷にからかわれるお人善しの研ぎ屋（『ボーケール町の乗合馬車』）。兄に苦勞させながら自分は三流女優のペットとなつて暮すプティ・ショーズことダニエルの墮落生活。滑稽の例としては、タラスコンの町にいたにしては町の片側のことしか知らないためタルタランを不思議がらせるにせ王子（実は泥棒でタラスコンの刑務所にかつて服役していた）。この様にドーデの作中人物には「隠したいこと」は誠に多いと認めてもよいであらう。『アルルの女』の劇化が成つた時、主人公の青年フレデリが恋し、この悲劇の原因となる「アルルの女」が、劇中（小説中でもそうだが）全く姿を現わさないのを作者は得意がっていたと云うが、この女は姿を現わさないのにふさわしい。正体をも現わさずにすませようとしていたはずであるから。情人である男が取り戻しに現れたことで、あばずれ女の正体がフレデリと両親に知られることになる。この浮気な都会女をあきらめ切れないことを、今度はフレデリが父にも母にも隠す。この一篇は女から男への隠蔽、子から親への隠蔽が連結することで成り立っている。云いかえればこの関係は、親から子へは「心配」として表われるが、男から女へは「疑惑」となつて毒性を表わす。愛人への疑惑はほとんど固定観念の様に

ドードの作品に浮び出て来る。そこに作者自らの恐怖に近い経験が反映しているとされるが、それだけに、この感情の主題としての価値はやや過大評価されているように思われる。『嘘をつく女』は専らこの疑惑が深まって行く過程を舞台にのせたもの（もとの小説もほぼ同じ）である。主人公の青年は母親の強い反対を押し切り、以前からの恋人の絶望をよそに、ある女性と暮し始める。しかしやがてこの内縁の妻に、隠された事柄の余りに多いことから疑惑が生じて来る。一日のある部分がどこかで表向き理由とちがう目的で過されているらしい。その事実が露れそうになると服毒して自殺を計る（小説では病にたおれる）。近郊の村に住むはずの姉妹のところへ電報を打つと、該当する名宛人はおろかその村さえ存在しない。名前さえ本当の名でないことがやがて分かる。「君は五年間も私をだまして来た。君は、毎日、毎時間嘘をついていた。君は僕の生活全部を知っている。でも僕は、僕は君の生活を全然知らないでいるのだ、全然ね。君の名前だって知らないんだ。そうだろう。あれは、君が持っていた名前は、君のじゃないんだ。ああ、嘘つき、君は嘘つきだ。一人の女が死にかけているというのに、なんとという名で呼んだらいいのかも僕にはわからないんだ……さあ、君はいつたい誰なんだ、どこから来たんだ？」最後にこの女の「第一の夫」が現れなかったら（小説の場合はこれすら現れない）この服毒自殺をとげた女性の正体はついに不明のまゝであったはずである。第二の夫への愛だけが本物で、後は全て嘘ばかりという情況は、ドードの作中の恋する男にとってはほとんど宿命に近いものである。フアーニーに恋したジャン・ゴッサンも、安物女優イルマ・ボレルに夢中になったダニエルも、やがて相手が正体不明の女性であることを知る。ダニエルはイルマに親兄弟のこと、一家の悲運、子供たちのけなげな決心など何物もかくさず喋り聞かせる。「僕は彼女に自分の心の全部を与えた。全生涯を彼女の前に投げ出したのだ。でも彼女自身の生活はというとそうではない。彼女は決して打ち明けようとはしなかった。僕は彼女が何者で、どここの生れであるかも知らない。ある日、結婚していたことがあるのかと云ってたずねたら、彼女は笑い出してしまった。」と兄への手紙に彼は書く。そのみか女は毎朝八時から十時まできままって謎の外出をする。ダニエルは

彼女の行き先を知ろうと多大の犠牲を払いさえするが真相はついかめない。『マノン・レスコー』を書き直したという意味のドーデの発言をミルポーは「グリマス」誌で嘲っているが、少くとも「愛人への疑惑」に対するドーデのいささか偏った執着を見ることは出来るであろう。

二重生活を送る作中人物は、正体不明の怪しげな女たちばかりではない。白いネクタイを締めた律気な老銀行員もまたそうなる破目に陥る。パリのさる大銀行の実直な行員であるジョワイユーズは妻に先立たれたはしたが、美しく清らかな三人の娘と平和な家庭を営んでいる。彼の平安を乱すものといつては、見るもの聞くもの何からでも彼の頭の中で異常な事件に発展させる、馬鹿げた空想力のみであった。娘三人の家庭という巢箱から毎日蜜を集めに出かけ、お土産一杯で帰宅する良き父親蜂だったジョワイユーズが、ふと口をすべらした社債批判がたたつて、年の瀬も迫る冬の町に職を奪われて投げ出される。ところでこの大變事を彼は娘たちに打ち明けることが出来ない。「夕方、サン・フェルディナン通りに帰つてからも、ジョワイユーズ氏は娘たちに何も云わなかった。彼にはそれを云う勇氣がなかった。家がそれで出来上つている光あふれるこの陽気さを暗くし、この美しい明るい眼を涙で曇らせたりすることは彼には堪え難いことに思われた。」⁶⁾そのうちに日はどんどん過ぎて行く。ジョワイユーズは二重生活者となる。毎日彼は銀行へ出勤をする振りをする。いつもの様に服を娘たちに着せてもらい、白いネクタイをつけてもらい、沢山に頼まれる買物をも十分收容できる大きな革カバンをかかえて家を出る。買物はなるべくわざと忘れることにしてある。そして永の一日を職探しに東奔西走して過すことになる。頭の中で発生する大事件は迫真の度を強める。家へ戻つたジョワイユーズは今まで通り、事務所で今日見聞きした事柄を娘たちに話すという狂言を演じ続けねばならぬ。娘たちが気付いたただ一つの変つたことは、失職後昼食を抜いている彼女らの父が驚くほどの食欲で夕食を食べることだけであった。作者はこの「痛ましくもまた滑稽な生活⁶⁾」を実話から採つたものと云っている。コミューンの内乱が起つた時、パリにとどまつた一郵便局員は反乱の終末後街頭に放り出される。免職となつたこの男もまた

「自分が役所を免職になったことを家族のものに話すに忍びなかった」のであった。こうした嘘は、一般に事実の隠蔽がそうであるように、持久的の精力が多大に必要とされるであろうが、この様な、精力の愚かな浪費をなす作中人物はドードの作品に決して数少ないとは云えない様に思われる。

ナバブこと成金のベルナル・ジャンスレーも同じくいまわしい事実の隠蔽を余儀なくされるが、彼はそのために名誉も巨富も犠牲にし、早々と人生の終末を迎える。マルセーユの貧しい釘売りの息子ベルナル・ジャンスレーは友人とテュニスへ渡り、幸運にもテュニス王の御用商人として千一夜的な財産を作り上げる。国王死去の後、ある事件がもとで彼を不倶戴天の敵として憎む旧友が入っている新王と不和となり、文化事業に財産を生かす野心を抱いてパリへ乗り込んで来る。人の善いジャンスレーは、病院創設やコルシカ島開発などいづれも怪しげな事業に巨額の無益な出資を強請され、財産をすり減らす。テュニスで凍結されている財産を回復するため目論んだテュニス国王大歓迎会は当日になって国王にすっぱかされる。財産保全の起死回生策として打って出たコルシカ島の補欠選挙では買収策が効を奏して当選する。最後の関門たる議員資格審査はしかし通過が怪しくなつて来る。今ではテュニスとパリを股にかけて銀行家となっている旧友の悪意ある策動が迫っているのである。ジャンスレーに好意を抱く立法院議長に急死され、旧友との和解にも失敗したジャンスレーは資格審査の席上、選挙活動中の買収作戦（世間並みのものだったが）を痛烈に非難される。敵意ある審査官の必殺の武器はしかし、この新議員が過去において破廉恥な職業を営むものだったという評判を巧みに採り上げることにある。ジャンスレーはかつてパリの陸軍士官学校の近くにダンス場兼暖味宿を営んでいた。かかる人物は議員たるにふさわしからず、選良の集う殿堂を汚すものだという宣言である。しかしこれは彼の敵の故意の混同なのである。ベルナルには一人の兄がある。釘売り一家の秘蔵っ子であり、大いなる希望であったこの兄のルイは、長男を尊ぶ南フランスの伝統の中で両親に大切にされ、甘やかされ、多大の犠牲を払ってパリへ送られた。大都会で墮落したこの男は兵隊相手の暖味宿を経営し、自らも病毒に脳を冒された結

果廃人となって帰郷したのであった。真相を知った父親は絶望のあまり死んでしまふ。一方弟のベルナルは敵に恰好の武器を提供したことになる。敵は彼の兄ルイの恥ずべき経歴を彼ベルナル・ジャンスレーの名のもとに非難するのである。彼は弁論に立つて、貧しい一青年が成金富豪となるに至った経歴、金満家となった現在の不幸を率直きわまりない言葉で述べ尽し、満場の共感を呼ぶ。彼は自己の弁護を全うするためあと一言で足りたはずなのである。

「誹謗は故意に二つの名を混同したのです。私はベルナル・ジャンスレーと申します。いま一人はジャンスレー・ルイという名です。」の一言で。しかし振り返った彼は背後の傍聴席に、息子を励まそうと遙か南フランスから駆けつけてきた母親の姿を見て、絶句して立ち往生する。「長男の破廉恥な行為を知らないまゝの母親の前ではそれはとても云い得ないことであつた。家族の尊敬と、連帯のためにも口に出せないことであつた。勝利を確実にするたつたの一言を喋らなかつたがために、評決は彼に利あらず、彼は議員資格を失う。「もし、彼が喋つたならば、彼女もまたはずかしさで死にはしないだろうか？ 彼は微笑む母親をじつと見つめた。それは断念の氣高い眼差しであつた。」自己犠牲を果したベルナル・ジャンスレーは、再起不能の状態を脱せぬままに憤死する。この孝心より発する献身的で悲壯な「事実の隠蔽」は、愛する者の「現実への不順応」をいたわつたものと呼んでよいであらう。

現実への不順応

第一帝政時代の胸甲騎兵で「栄光とナポレオン崇拜とに凝り固つた」一老大佐が、普仏戦争に勝利して凱旋して来るフランス軍の凱旋式を見ようがために、わざわざ住みに来ていたエトワール広場の角の家の一つで、我軍大敗の悲報に接して脳卒中で倒れる。三日間の不動と昏睡の後、意識が少しもどつた病人に、折から入つたフランス軍大勝利の吉報が回復への力を与える。この報せが全くの誤報だと判明した時、医師と看病の孫娘との間に嘘のためのとり決め

が成立する。「私たちは愕然として、顔を見合せました。彼女は父のことを考えて悲嘆にくれています。私は老人のことを思いやると身震いがしました。どうしたって、この新しい打撃には耐えられないでしょう……しかし、それではどうしたらいいのでしょうか？……彼の喜び、彼をよみがえらせた幻想をそのままにしておきましょうか？……そうすれば彼を欺かねばなりません……『いいわ、嘘をつきましょう！』と手早く涙をぬぐって、けなげな娘は私に云いました。そして、はればれた顔でお祖父さんの部屋へ入って行きました。」この日から、絶えず戦況を知りたがる病人の枕もとへ、現実を全く裏返しにした様な我軍進撃の報せがもたらされる。相手はかつてドイツ各地を転戦した旧軍人であるからこの虚偽の戦況報告はなかなか難事業となる。そしてドイツの地図の上に立てられた小さな旗によって、あと一週間たてばベルリン入城と戦局が決定した時、皮肉にもプロシャ軍はパリへ一週間の地点に迫っている。パリ攻囲の間は即ち「ベルリン攻囲」となって老人を大喜びさせる。既に音信不通となった父の手紙を娘は偽造して読んで聞かせる。老人はこの手紙に勝者の寛容を勧める手紙を返す。しかし遂にこの老人が酷薄な現実を目の当りにする日は来るのである。プロシャ軍が明日はパリに入城するということを聞き知った大佐は勿論フランス軍の凱旋入城式と思ひ込む。その朝、かぶとに長刀、第一帝政時代の胸甲騎兵の誇り高き姿に盛装した老大佐は、医師と孫娘の油断のすきに、バルコニーへ現われる。老人が見たものはシューベルトの凱旋行進曲とともに進んで来るプロシャ兵。広場の沈黙の中に「武器をとれ……プロシャ軍だ」と叫んだ大佐は、ばったりと倒れて、今度こそはほんとうに息絶える。この大佐はたしかにエクセントリックにちがいない。八十才の老齢、旧軍人の栄光の思い出など、彼に柔軟性を欠除せしめる条件は自然に具わっている。もう一人の軍人、死すとも手放さぬはずであった愛する連隊旗が、武装解除の日、プロシャ兵の前で一片の引取証と交換されようとした時、旗竿にしがみついて憤死する老旗手（『旗手』と同じほど柔軟性が欠除しているであろう。事実に順応出来ない者は、嘘が除かれた時、事実の前で死ぬ以外ののであろう。そしてまた別の敗亡の現実に順応出来なかつたもう一人の老人も、やはり嘘が露われて後、そんなに永く

は生きのびなかったようである。

古い南フランスの農村にとって丘毎の風車は、名誉ある軍旗に等しいものであったかも知れない。産業の近代化がプロヴァンスの村々にも波及して製粉工場が出現した時、消えて行く風車に対し別離の苦しみが感じられたことは想像できる。しかし風車の消失でなく敗亡、利害でなく名誉に問題が成り変る時、再び一老人をめぐり現実に対して嘘が対決する。他の風車小屋が廃業して取りこわされ、オリヴ島になってしまった後も、粉挽き老人コルニーユ親方の風車だけはミストラルの吹く中で元気に廻っている。近代的な製粉工場が作られた時、悪魔の産物の様に罵っていた老人の風車である。相変らず麦を運ぶ驢馬を引いた老人の姿を坂道で見かけるが、誰一人として風車へは近寄らせて貰えない。大事な孫娘すら働きに出してしまっただけである。この風車小屋の「秘密」がある日ふとしたことから露見する。風車はもう麦など挽いてはいなかった。老人が驢馬に運ばせていたのは壁土。この秘密を知られまいがために老人は不如意の生活を忍んでいたのである。即ち嘘で以て風車の名誉を守るために。冗談や個人の利害が関係していない証拠にかわいい孫娘を手離す悲しみまで忍ぶ老人の姿がある。やはりこの嘘も自己犠牲的なのである。さらに注意すべきは、この嘘の行為が非個人的な価値の擁護である点であろう。風車小屋に何者かが侵入し、真相が知られたとわかった時、老人は「こうなったからには死ぬよりほかはないわい。……風車は赤恥をかかされちまった⁽⁴⁾」と泣くが、その理由と結論の間の不明快な飛躍は、亡国の老太佐の死に比べ、「結論」であるだけに少し大げさではある。老人の秘密を知って村人が感激し、村中総出で風車小屋に麦の袋を運ぶのも大変に観念的な行為なのである。感情の結果というよりもむしろ儀式と見てよいだろう。村人は本当に今粉を挽いてもらう気はなく、むしろ凱歌をあげて老人を村へかついで連れて行くこうとするのである。そして多くの儀式がそうであるように、これもまた決して行動の見本なのではない。むしろその行動に含まれる精神の見本なのである。従って『コルニーユ親方の秘密』は大変に『最後の授業』に近縁的であると云える。

戦勝国ドイツの手に渡る国境の村の小学校での最後のフランス語の授業。遅刻して登校して来た少年の目に映る不思議な授業風景。「僕は先生が、督学官の来る日か賞品授与式の日でなければ着ない、立派な、緑色のフロックコートを着て、細かくひだのついた胸飾りをつけ、刺しゅうをした黒い絹の縁なし帽をかぶっているのに気がついた。それに教室全体に、何か異様なおごそかさがあった。いちばん驚かされたのは、教室の奥のふだんは空いている腰掛けに、村の人たちが、僕たちのように黙って腰をおろしていることだった。三角帽を持ったオゼールじいさん、元の村長、元の郵便配達夫、なお、その他、大勢の人たち。そして、この人たちはみんな悲しそうだった。オゼールじいさんは、縁のいたんだ古い初等読本を持って来ていて、ひざの上にひろげ、大きな眼鏡を、開いたページの上に置いていた。」村の老人たちは、もとより今日一日フランス語をよりよく学ぶためにやって来たのではない。去り行くフランス語即ち祖国の後姿に敬礼を送るべく来ていたのである。フランス少年も文法の暗誦をさせられるが、その返答はコルニーユ親方もとへ遅ればせながら届けられた麦粒と変らない。これもまたふだんの勉強の様な何事かの練習とは全く異なる儀式であろう。アメル先生がその日用意した習字のお手本は従って真の意味でのお手本ではない。アメル先生と村の老人たちの間では儀式が成り立ち、先生はこの儀式で以てフランス語の知識ではなく国語の精神を残そうとしたことになる。ただ、こうした観念的な儀式には通ぜぬはずのフランス少年までが大人っぽく最後の授業に感激する点を不思議に思ってもよいであろう。非個人的な価値に動かされそうにもない少年にまで、その作用が延長されていることに、危なげな印象の生まれることは否めない。そうした無理はあるにしても、これらの小篇は、ある種の価値は嘘という行為でしか擁護できなくなる事実を、個人の感情というわくの中で、題材としたものであろう。自然は全てこの「わく」に由来する。

非個人的な価値擁護の属性として柔軟性の欠除が当然あろう。一方、現実はいつでも裏切る用意をしている。敗戦、産業革命。従って現実の裏切りに暫時「嘘」が対抗する。嘘はここでは少しも柔軟さの証拠ではなく、むしろ硬

直の結果である。そしてこれら「嘘」という後めたい手段と硬直性という生命の欠除は、そのどちらをもきれいさっぱり持ち合せていない人々を目立たせ、暗に批判する。コルニュー親方の秘密を知った村人が「胸がはり裂ける」ように感じたのはそのことであつたらう。プロシヤ軍占領中は商売をやめて店を閉めたため、ぼろもうけの機会を無し家賃を払えなくなった村の酒場の主人、彼を口汚く罵る村会議員の家主は、現実への順応と不順応の次元の差を見せつけるために登場したのであらう。酒場の主人がプロシヤ兵には酒を売らぬというのはやはり儀式にも近いし、さらにコルニュー親方の嘘にも近い。しかし嘘による現実回避だけでなく、現実と非現実の混同もまた無視できない。

空想的英雄主義

平和な家庭を乱すまいと免職になつた事実を延々と隠して毎日「出勤」を続ける元銀行員ジョワイユーズは「いたつて豊かなまた驚くべき空想の人⁽⁸⁾」でもあつた。在職時代の彼は通勤途上空想にふける。小さな凹凸まで知り尽くしている慣れた通勤路であるから彼の空想能力は完全に解放される。洗濯女の小馬車の包みの上で子供が危なかつかしく揺れているのを見たとする。彼は「子供が危いですよ！」と叫ぶだけではない。車が去つた後に頭の中で悲劇が始まる。幼児は転落する。車輪が迫る。ジョワイユーズは飛び込んで幼児の生命を救うが自分は血だらけになつて倒れる。人の群れの中を重傷の彼は葉屋へ、次いで自分の家へと担ぎこまれる。無残な姿の父親を見て娘たちはきぬを裂く様な絶望の叫び声を上げる。「お父様っ!」、これを彼は往来の人ごみの中で実際に叫び通行人を驚かせるのである。乗合馬車の中で巨大な男の向いの席に坐る。この男がいつの間にかジョワイユーズ氏の娘の一人を抱きかかえ、父親が制止するのも無視して娘に接吻しようとする。ジョワイユーズはやむなく短刀を無頼漢の胸に突き立て最寄りの警察署へ自首して云う。「私は乗合馬車の中で一人の男を殺して来ました。」この声で自分も我に返るが、他の乗客はも

ちろん胆をつぶす。次の停留所で彼は飛び出さざるをえない。彼の頭の中で自己増殖した脚本がクライマックスで科白になって上演されるのである。

南フランスの小都会タラスコンのにせ英雄タルタランもこの様にして登場する。この平和な年金生活者が重武装し、トルコ風装束に身を包んで、アルジェリアへ渡ることとなったのは明らかに不本意な結果だったのであり、彼もジョワイユーズ同様空想家にすぎなかったのである。ただ彼の場合は旺盛な冒険の夢想が日常生活にまで浸透している。書齋で世界中の野蛮な武器類にかこまれ、フェニモア・クーパーに読みふけるタルタランは突如雄叫びを上げて立ち上り、本を投げ出して壁の武器へと飛びついたりする。クラブへ向う夜の道は一大決戦場である。部屋の中で撃剣の仕上げをしてから左のポケットに棍棒、右のポケットに拳銃、内ポケットには短剣、そして左手にはとげつき鉄槌、右手には仕込み杖というものものしい武装で彼は曲者の待ち伏せる夜の街路へと突入する。

こうした模範的冒険の中に暮しながら、一方現実の危険も針小棒大に空想し、河一つへだてるだけのボーケールの町へさえも、橋の上で突風にさらわれるのを恐れて行ったことがない。ドードはタラスコンの町をこの様な英雄志向の腰抜け男ばかりが住む町として三部作の舞台としたのであるから、町の人々にその後永く怨まれたというドードの言葉も全くの冗談ではないであろう。そして空想家の楽園タラスコンの住民たちの好戦的空想が実行に移された時に生じる滑稽が、作者が三部作で繰り返し狙った笑いなのである。内心の非英雄的な現実主義と、外界の同じく非英雄主義的な現実とが交^{とも}交^り彼らの冒険願望に対し裏切りを働く。北フランスを席捲したプロシヤ軍を迎え撃とうとはやり立つタラスコン市民を描いた短篇『タラスコンの防衛』にまずそれは見られるのである。町には恐ろしい名前の義勇兵団が続々と生れ、みんなぼうぼうとひげを伸ばし、銃や剣で毛虫の様に武装して町を濶歩する。ついにはお互士恐ろしくなつて出歩けなくなつてしまう。やがて国民軍が組織され軍事演習が正式に始まる。タラスコンの勇士たちは町の人気を独占する。しかし三ヶ月経つてもタラスコン部隊が出撃せぬため町の熱はさめ、兵士は焦立つて出撃を熱

望し、壮行会まではや企画される。進軍命令を要請するため県庁へ押しかけた司令官に知事は微笑を浮べる。タラスコンの兵士たちから送られて来た嘆願書の山。虚弱の故を以て出征の免除を願ひ、医師、司祭、公証人の弁明書を添えた三百通以上もの悲壮な嘆願書が知事宛に届いていたのである。

『タラスコン港』の冒頭にある『バンペリグスト僧院の攻囲と開城』では、非英雄主義的な現実も肩すかしを食わせる。タラスコン市民に親しまれているバンペリグスト僧院が政府の命令で閉鎖されることとなり僧院はこれを拒否する。タラスコンの男たちは僧院応援のためタルタランに率いられて大挙武装して、政府軍が包囲する僧院にたて籠る。政府軍はもとより手荒な行動に出る意志はなく、食糧攻めの持久戦法であった。敵襲を待ち暮らしているタルタランたちは、終日演習を行い腹をすかせて、たちまち僧院の貯えを食い尽す。朝のココアが底をついた所で義勇軍は引き上げ、永く持ちこたえられたはずの僧院は早々と食糧不足で政府軍の手に落ちる。冒険空想家タルタランを主人公とした三部作はこの願望不成就の二つの型を綜合している。優柔不断と冒険的現実の不在が彼の必死の思いの冒険行を空騒ぎに終らせる。

タルタランは常に虚栄心によって冒険旅行を余儀なくされる。町の人たちは決しておだてたのではない。むしろ買いかぶつたのである。主人公と同質の空想家である町の人たちにとってただの冒険空想家と真の冒険家との境目は判然としない。ライオン狩りの夢を洩らしただけのタルタランは既にライオン狩りの大家としての名声を博し、この虚名からの後戻りを虚栄心が妨げる。一方町の人たちも、事は他人のことであるから、空想が現実化することを執拗に求め、その結果タルタランは退路を断たれる。タルタランが非冒険的現実主義に発する優柔不断を自ら抑えて、アルジュリアへ猛獣狩りに出発せねばならなくなったこれが原因である。買いかぶられて後へ退けなくなるといふ極く平凡な現象にそれは類するであろうが、作品としては『タルタランの大冒険』は虚を實にするといふ「債務」を履行せねばならぬ愚かな労苦の物語となる。そしてその「債務の履行」を妨げる事柄がいろいろに発生する。それは出発に

先立つ情ない優柔不断だけでは終らない。到着したアルジェの町はタルタランの千一夜的空想を裏切つてタラスコンと余り変らない都会であつた。夜の荒野で射ち倒したライオンは一夜明ければ野菜島の中に倒れた瀕死の小さな驢馬となる。そのうちアラビアの美女（実はマルセーユから来た娼婦）と暮しはじめて一向に猛獣狩りに着手しない。一方故郷の人々が首を長くしてタルタランの英雄的消息を待ち望んでいることが故国の一枚の新聞から判明する。いわば債務の履行が督促されたに等しい。自称亡命の王子（実は泥棒）と共にあてのないライオン狩りが始まる。王子が彼を盗んで逃げ去り、荒野の中で絶望しているところへついにライオンが出現する。夢中で射殺したライオンは実は僧院が寄附金集めに使っている溫和しいマスコットのライオン。彼はこのため更に裁判で罰金を科せられ、冒険旅行は惨めに終りを告げる。荷物運びに使つていた駱駝らくだが彼になつき、船にまで泳ぎついたり、汽車を追つて走つたりするので、こっそり帰国することも出来ない。誤つて殺されたあわれなライオンの皮が先に故郷の町へ送られていたことから、町の人たちの空想は大発展をとげ、タルタランは数知れぬライオンを退治した大英雄として歓呼の声に迎えられる。同郷人の誇大妄想が彼の名声を作り、今度は救つたのであつて、タラスコンは愚者の楽園に類する町となる。「私の目的というのは、パンペリグストとかキュキュニャンと云つた変な町を作つて変な住民をいろいろ登場させて見ることです。」と親友に書き送っているが、「嘘」が普通の運命をたどらない南フランスを、タラスコンの町を借りてドードは作り出したと云えよう。タルタランは冒険の失敗という事実を故郷の人々に隠蔽したとは確に云えるけれども、空想によつて嘘と事実の区別が道徳上も無意味となる「変な町」の話なのだと思つた方がよいのであろう。

虚言癖

タルタランを主人公とした三部作（出版はほぼ二〇年に亘る）において当然タルタランは全く同じままではない。

空想癖と虚栄心は相変らず保ち続けるが、第二作のタルタランは敢然とユングフラウを征服し、モンブラン登頂をも試みる。第三作においても、南海の島における新タラスコン建設は惨憺たる失敗に終ったとは云え、空想を実行に移す点において町の指導者たる実行力を示す。責任を問われての裁判においても、むしろ従容として非難を受ける態度を示すと云つてよいであろう。タラスコンの町ならではの嘘と事実の混同に無意識的に乗ずる第一作のタルタランのままだではないようである。この、嘘つき男としてはいささか生彩を欠き始めた主人公タルタランを補うかの様に、より純血種の嘘つき男ボンパールが現れる。この男の方がむしろ原タルタランに近いと云う人もある⁴⁴⁾。同名の人物は『アルプスのタルタラン』以前に他の作品にも現れるが、やはりあらゆる大事件の現場に居合せたと称する虚言家として登場する。もつともタラスコンの町にはとても一つの筏には乗り切れないほどの人数で、「メデューズ号」の生き残りが生存していたりするので、ボンパールの特長は虚言の頻度、量であろう。ユングフラウ征服を目指すタルタランが、世界的山案内人として紹介されたのが意外にも同郷人ボンパールであった。「それはボンパールであった。クラブの元の管理人で、いい人物で、しかしとてつもない空想力に取りつかれてただの一言も本当の事が云えず、そのためタルタラスコンでは「だまし屋」という渾名あだのついていた男である。タラスコンで「だまし屋」といわれるのだから、どんなものだからおわかりいただきたい。それが今は天下無双の山案内人、アルプスや、ヒマラヤや、大月山連峰の登頂者なのだ。⁴⁵⁾」彼がタルタランに吹き込んだ次の様なほらは観光スイスの戯画ではあろう。アルプス全山は今では一大観光会社によって経営、管理されており、あらゆる有名な危険は、会社が適当にしつらえた見せかけだけの、その実、安全なものだというのである。このほらに中毒したタルタランはユングフラウ登頂にあたって、クレヴァスに落ちこもるが、雪崩が起きようが歌など歌つてびくともせず、本物の山案内人をおどろかせる。タラスコンの町の登山クラブの会長選挙に勝つためにはこれではまだ足らず、さらにモンブランを目差さねばならない。ところが会長タルタランの実行力に恐れをなしたボンパールから危険が事実であることを明かされ、かつ本物の山案内人と

も別れた後なので、俄然山は恐怖を以て迫つて来る。ボンパールはやはりタルタランの心配通り、ストックの使い方も知らず、四つ這いでしか雪の上を進めない登山の全くの素人であった。転落の恐怖に二人は縮み上ることになる。

ボンパールは嘘が現実化することを少しも必要としない。その点タルタランとはもともと異なっている。虚栄が彼の嘘の原理でもない。むしろ壮大な経歴に対する夢のために嘘をついているのであろう。従つてボンパールの嘘は無害な嘘に属する。しかし政治家ニユマ・ルメスタンの空約束は農民の一家を破滅させ、義妹を死に至らせる。南仏の町アプス（架空の町）出身の代議士ニユマ・ルメスタンは故郷の町の農事共進会で長太鼓と笛の名手ヴァルマジュールの演奏に感激し、パリで芸術家として遇すること、高額収入が確実なことを保証する。これが農民芸術家の一家を血迷わせる。一方パリから姉夫婦につれられて来たニユマの義妹は、母から南フランスの想像力を受け継いでいて、この長太鼓演奏家の中にいしえの貴族芸術家トゥルバドゥールの生き残りを空想し恋するにさえ至る。パリへ戻つたニユマ・ルメスタン一家のもとへ、土地を離れ父妹とともに上京して来たヴァルマジュール一家が現れる。ニユマの義妹の世話で演奏も披露され、上流人士相手の演奏会も、はじめは珍しがられて好評を博するが、やがて飽きられて行く。高額収入というニユマの保証に執念深くしがみつくと離農一家はニユマの重荷になる。ニユマの義妹の兄への思慕に目をつけたヴァルマジュールの妹は、この二人の結婚を再起の手段として利用しようと思ひ立ち、画策を始める。空想的な恋から徐々に覚めたニユマの義妹はヴァルマジュールの妹の強引な要求に屈するうち生来の病気を急速に悪化させる。結婚話の失敗と一家の零落を怨んだヴァルマジュールの妹は、ニユマの浮気を夫人に密告して離婚の危機に陥らせる。ニユマの義妹は南フランスでの養生も空しく病死する。作者のこの作品での意図は南と北の対比であった。空想的で、好色で、嘘を嘘とも思わない無責任な南仏人の夫、誠実で貞淑で、嘘とは無縁なパリ女たる夫人。そこにドードエが彼の賢夫人との間に感じ取つたことを拡大して移し入れたことは考えられる。しかし、作者は主人公ニユマの嘘を必ずしも断罪してはいないように見える。事態が深刻化した責任は、勿論半ば以上ニユマの

空想的（久し振りに帰った南仏の陽光と風に酔って気が大きくなっていた）な空約束にあるが、残りの半ば近くは南仏の陽のもとでつかれた嘘がどこか他の土地で現実化することを執念深く要求した農民芸術家一家にあるように見える。彼らもまたパリでの成功を南仏人らしく過大に空想したのであれば、やはり同じく空想力の犠牲とみなすべきであるだろう。ニューマも被害者の農民とともに、「樹液と太陽の光とに酔っ払って、おどろくべき、罪のない作り話に、我と我が身をだましてしまふ」空想家、即興詩人であったらうから。

タルタランはじめ全市民から多額の土地購入金を巻き上げた上、彼らを雨と食人種の南海の島（実は英国領土）へ送り込む、ベルギー人の自称モンス公爵という歴とした詐欺漢と対照的に、ドーデの南フランスの嘘つきは、道徳的には歴然とせず、不徹底な点が魅力なのであろう。不徹底な曖昧な悪徳。南仏タラスコン住民の頭腦の曇りとしてドーデが描き出したのはこうした架空の悪徳だと云えよう。それは小児的な嘘に分類出来るとしても、恐らくは実在の嘘とは云えず、空想的な嘘としか云いようがないであらう。晩年の中篇『初旅初嘘』の少年「僕」をボーケール（タラスコンの対岸）からリヨンまでの四日間のローヌ河をさか上る船旅の間一喜一憂させたものこそ、本当の意味での「嘘」、虚栄心と顕示欲求をみなぎらせた虚言ではなかったか。

「僕」は従弟とともにリヨンの中学へ入学のためにニームを出発したのである。折からクリミア戦争の最中。英国の海洋小説、病気で帰国した同級の見習水夫の感化、初めての船旅、親元を離れた中学生二人連れの元気さなどが寄り集って嘘を発生させる。「地平線上に嵐を呼び集める雲のように、僕の心中には天晴れな嘘が頭をもたげて来た。この嘘はまだはつきりした形を持っていなかったが、これから数日のわれわれの生活に一大変化を来たそうとするものであった。」船の外輪についての一寸した知ったかぶりから虚栄の魔がとりつく。「君、船の事、よく知ってるみたいだねえ！君はもしかして……」僕はみなまで云わず、「僕はこの従弟と一しょにヴァルナ海軍兵学校を出たんですよ！」と答えた」多数乗り合せている帰還兵からは少尉候補生殿と買いかぶられ、ここから四日間続く船

上のお芝居が始まる。その実二人の中学生は、港の宿屋と船長へあてた親からの依頼状を貰ってやっと旅に出た少年にすぎない。甲板から船室への降り方もわからぬ滑稽。その彼が甲板では兵士を集めてクリミヤ戦での武勲話に花を咲かせる。実は見習水夫の思い出話をもとに、当の聴衆たる兵士たちの言ったことを記憶しておいて細部を補強したものである。リヨンへ帰る二人の婦人客の敬愛を受け、御馳走を振舞って無駄使いをする。少尉殿の大胆さを見せるため、夜の停泊地で近くの果樹園を兵士の一隊とともに荒して罰金を取られる。すえ膳を食うしたたか者たることを示すため、酒場の看板娘に逢い引きを敢行して窓から突き落とされる。馬が馱せるといふ嘘から、リヨンの二婦人に馬車旅行に切りかえることを決心させておいて港に置いてきぼりを食わせる。従弟も士官候補生といふふれ込みであるが、彼はコンスタンチノープルでトルコ皇帝近衛軽騎兵隊司令官の許婚者と恋仲になり、略奪計画が発覚して相手の女性を死なせた憂愁の過去を持つ青年軍人ということになっている。マルセーユ、リヨン、パリ線の列車の中は、トルコの探偵が彼をつけ狙っているのでローヌ河の汽船を選んだのだなどと云う。船客の大半が彼の大言壮語を鵜呑みにする状況はタルタラン三部作に類似するが、主人公はむしろボンパールに近い虚言を弄する。この場合嘘を現実化するとは少しも必要でないし不可能でもある。ただ少年的な虚実混同に陥る一方、「さくら」の養成を心がける策略性の混在は「僕」をして、稚気満々たるタルタランよりもしたたかな嘘つき男に彼をしているとも云える。エゴイズムに発するが利害を目的とせぬ、無害かつ無益な精力浪費に、エゴイズムと愚行の描写家ドーデが回帰して倦まない様は少くとも見て取れるのである。「僕の嘘は決して人をおとし入れたり、自分の利益を計ったりする目的は持っていない。僕に嘘をつかせたのは想像力である。僕は子供の夢を生きて動くものにしたくて嘘をついたのだ。しまいには、僕自身がこの嘘を信ずるようになった。僕はあこがれていた、あの海軍少尉候補生にもうなっているのだと思うようになった。」この「海軍少尉候補生」を次々と他の「英雄的」な職業に取り換えることによって、彼はまだいくつもの滑稽作品を作り出すことができたであろう。そしてこの「僕」がたとえ他作品においては「僕」でなくとも、

そこにはドーデの自嘲とノスタルジーはやはりみなぎっているであろう。

弱 者

しかしこれらの虚言家、嘘つきはドーデの作品の中にあつて曖昧に野放しとなり、少しも罰せられないのであろうか。虚言家ニユマ・ルメスタンの空約束はたしかに残酷に罰せられた。しかし冒険模倣者タルタランや『初旅初嘘』の士官候補生などの「にせ者」は何ら罰を受けないのか。正体が暴露されること（タルタランは「新タラスコン」総督の地位からただの囚人に転落、船旅の「僕」は最後に中学生であることがばれる）だけが唯一の罰なのであろうか。罰はむしろ小さな滑稽場面の中に求めることができよう。それは本物との遭遇である。

ライオンを求めて馬車の旅を続けるタルタランの前に舞い込んで来たちび紳士。「年寄りで、ぎすぎすして、しわだらけで堅苦しい様子の人物。顔は握り拳こぶしぐらいの大きさで、指五本ほどの高さの黒絹ネクタイを結び、持ち物は皮のかばんと雨傘。どこから見ても田舎公証人である。⁽⁶⁾」このちび紳士が勇者タルタランの重裝備に恐れ入らず、ただ迷惑しているだけなのに腹を立てたタルタランは段々と高飛車になる。せめて自分の倒したライオンの数ぐらいの毛は生やして差し上げたいと、相手の毛の薄い脳天を笑いものにする。豹狩りで有名なボンボネルとは二十遍以上も狩をしたが、豹など猫の大きいもので、相手にとってとんと不足だと云い放ち、乗客一同を感心させる。ちび紳士が下車した後で聞けば、まさかと思つたあの貧相な紳士が、当のボンボネルであつて、タルタランは赤恥をかくことになる。『初旅初嘘』の「僕」は、三人の子供をつれて旅している「イギリス人」が少しも彼の武勲談に耳を傾けず、おまけに嘲笑らしいものを洩らすので目の敵にしている。フランス海軍を侮辱したというわけである。旅も終りに近い頃、ある港で、酔つた帰還兵の一人が船から河へ落ちる。ポスフォラス海峡を泳ぎ渡り、人命救助も何度も行つたこ

とになっている金槌の海軍士官候補生は皆に呼び立てられ、面目上水難者より先に土左衛門となるために水に飛びこまねばならぬ危機にひんする。その兵士を水から無事救い上げたのは憎きイギリス人であった。そして終着港のリヨンで下船の際、彼らのボタンの中学校名を指さしてにせ士官候補生の化けの皮をはいだのもこの男である。後でできればこの男はエコール・ポリテクニクの教官たる海軍中佐であった。

滑稽にせ物が本物の前で赤恥をかくことだけではない。本物もにせ物も実体と外観が裏腹なのである。愚かな完全主義者のにせ物は自ら外観に凝るだけではない、相手の外観にあざむかれるのである。これは「にせ物」主題に伴う普通な一要素にすぎないだろうが、殊のほか外観尊重的なドードエの虚栄家たち（タルタランはトルコ人の服装を必須と考えたし『初旅初嘘』の「僕」は荒い言葉づかいをし錨の上に寝ころぶ）には特に似つかわしい要素であろう。この様に嘘つき男を恥入らせ嘘を罰する要素は用意されていると云ってよいであろう。さらに南仏人自らの反省（『タラスコン港』末尾の逆誇張、過小化はこれに算えないとして）も見出すことが出来る。ニューマ・ルメスタンの腹心メジャンは冷静沈着な若旁人であるが、嘘をつくぞと感じた途端、言葉を控えるよう自己を鍛錬した彼のような「悔い改めた南仏人」も稀には描かれる。

しかしドードエは嘘が罰せられる教訓を述べたのではない。嘘はそれが隠蔽的であれ顯示的であれ、いずれも現実的困難の回避であるからには、全て嘘は弱者の姿の一部であろう。弱者には分類出来そうにない偽善者すらそうである。『ナバブ』全篇を通しての不快なる人物の一人、アイルランド人医師ジェンキンスは、博愛的温顔とは裏腹な冷血ぶりを非難されて云う。「偽善者ですと？　そうです。それは本当です。ですが人は偽善者として生れて来るものではありません。……人は人生の困難に行き当って、無理にそれにならされるのです。向い風が吹いていて、しかも人が進みたいとねがっている時には、人は蛇行します。私も風をななめに受けて蛇行したのです。……私の人生の出だしがみじめで、世間への入場が失敗だったことをおとがめになって下さい。」⁸⁹

彼の描く弱者たちはあきらめ、忍従することによって苛酷な現実に対応する者ばかりではない。不合理で愚かな手
段たる嘘によってもまた現実を迂回し、払い除けようとする。ただタラスコンを中心とする彼の架空の南仏にあって
は嘘は弱者の回避手段以上の悪徳、否むしろ情熱に近いものに見える。そこでは嘘は、事実との不一致も道徳との不
一致も不問に付されるし、嘘ににらみを利かす本物も滅多にここまでは現れない樂園である。虚言癖をバリで手きび
しく罰せられたニュマ・ルメスタンも南へ向う列車がヴァランスを過ぎる頃から気分が変り始め、タラスコンから単
線の支線となってプロヴァンスの只中へ進み入る頃にはほとんど陶酔の状態に近づくのも、彼がただ単に故郷の町へ
近づきつつあるからばかりではないであろう。

- (註) Alphonse Daudet : Œuvres complètes illustrées, Edition Ne Variatur Tome V Contes du Lundi p. 143.
- (①) O. C. Tome V Contes du Lundi p. 144.
 - (②) O. C. Tome X Nabab p. 202.
 - (③) O. C. Tome V Les Femmes d'artistes p. 57
 - (④) O. C. Tome II Le Petit Chose p. 196.
 - (⑤) O. C. Tome X Nabab p. 67.
 - (⑥) O. C. Tome XVII Trente ans de Paris p. 11.
 - (⑦) O. C. Tome X Nabab p. 321.
 - (⑧) O. C. Tome III Lettres à un absent p. 66.
 - (⑨) O. C. Tome III Lettres de mon moulin p. 14.
 - (⑩) O. C. Tome V Contes du Lundi p. 2.
 - (⑪) O. C. Tome X Nabab p. 62.
 - (⑫) Lettres familiales d'Alphonse Daudet. Paris : Lib. Plon, 1944.
 - (⑬) Murray Sachs : "Alphonse Daudet's Tartarin Trilogy" Modern Language Review April 1966. p. 215.

- (5) O. C. Tome XV Tartarin sur les Alpes p. 42.
- (6) O. C. Tome XXI Premier voyage premier mensonge p. 10.
- (7) O. C. Tome XXI ibid. p. 23.
- (8) O. C. Tome W Tartarin de Tarascon p. 107.
- (9) O. C. Tome X Nabab p. 358.